

学力向上フロンティア事業中間報告書

・学校の概要（平成15年4月現在）

県名	三重県
----	-----

名賀郡青山町立阿保小学校

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	障害児学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	4	4	2	22	31
児童数	92	87	90	99	124	128	7	627	

・研究の概要

1. 研究主題

子どもが集中し、主体的に学ぶ力を引き出す授業の創造

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

全学年・全学級 国語・音楽・算数・理科・社会・体育

どの学年でも一斉授業で学力を向上させることのできる方法・原則を研究するため。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度

テーマ 子どもが集中し、主体的に学ぶ力を育てる授業の創造

仮説 われわれ教師が、知識も習得し、思考力もつけられる授業（追求形式の授業）を構築していくことができれば、その授業を通して子どもたちの主体的な学習能力（能動的に教材に働きかけ、課題をつくり、論理的に解決していく力）を引き出すことができるのではないかと。

研究内容・方法

1 研究の方向

興味・関心・意欲の向上 思考力・判断力の向上
表現力・技能力の向上 知識の獲得・理解力の向上

学力（主体的な学習能力）の向上

生きる力（主体的に物事に対応していく力）

2 研究の柱

子どもが能動的に教材に働きかけ、自分たちで課題をつくり、自分たちで論理的に追求していく力を育てる授業方法の研究

国語科（追求方式の授業）

基礎知識獲得の段階（全ての子どもが確実に基礎知識を獲得する段階）

追求の段階（全ての子どもが確実に認識を転換・発展、知識を深化・変化させることのできる段階）

他教科・領域への発展

音楽（合唱：国語の追求を応用し、イメージを変え、それを体で表現する。友だちとのコミュニケーション能力を引き出し、学習集団づくりにも大きな効果をもたらす。）

他教科・領域

3 側面的研究

個人学習

- ・読み・書き・計算の力を育てるための方法の研究
- ・ていねいさ・工夫・整理できる能力を育てる方法の研究

生活・仕事

- ・自分から課題をもち、周りに対応しながら取り組む能力を育てる方法の研究

学級づくり

- ・学習集団としての学級づくりの方法の研究

平成15年度

テーマ 子どもが集中し、主体的に学ぶ力を育てる授業の創造

仮説

1 追求方式の授業をつくる。

子どもの成長・発達を目的とした追求方式の授業をつくっていく中で、子どもは知識を獲得し、思考力・判断力・表現力も引き出されるはずである。

追求方式の授業(1)+(2)

(1) 知識・技能を獲得する段階

(2) 思考力・判断力・表現力を発揮し、認識を転換・発展、知識を深化・変化させる段階

一人でもったイメージ・考え (できない・分からない段階)

学習集団づくり

- (1) 自分の考えをもつ。
- (2) 友達の考えを聴く。
- (3) 自分の意見を出す。
- (4) 教材や友達の考えから問題をつくる。
- (5) 意見を整理・分類する。
- (6) 教材の中から証拠を探す。

発達

追求の過程

疑問をつくる。「変だ、おかしい。」「なぜ、こんなことするの?」

の疑問に対する多様な意見を整理・分類して対立問題をつくる。

の対立問題を論証して(小さい問題を解決する。証拠をさがす)解決する。

以上の過程をもとにイメージ・考えを変える。

新しいイメージ・考え (できる・分かる段階)

2 追求方式の授業が成立する条件 : 学習集団づくり

子ども一人一人に知識・言葉・言葉の意味の獲得が必要

子ども一人一人にイメージ・考え・意見表明・思考・判断が必要

論証できるコミュニケーション(対話, 対立)が成立する学級集団が必要

3 追求方式の授業が成立する条件 : 子どもを成長・発達させる「教材」選択

認識系 (国語 社会 理科 算数 など): 追求することによって、子どもの認識(言葉の意味やイメージ)を変化・発達させることのできる本質的な内容をもつ教材を選ぶ。

表現系 (音楽 体育 図工 表現 朗読 など): 追求することによって、子どもの表現力を発達させることのできる本質的な内容をもつ教材を選ぶ。

研究内容・方法

研修とは

最も重要なのは個人研修。研修の場は毎時毎時の授業、意識的に課題をもって取り組み、自分で自分をかえていくことが研修。

課題をもった個人が共通のテーマで相互に交流しあい、個人研修の限界を乗り越えるために行うのが共同研修。(学年研修 連学年研修 全体研修)

1 個人研修

(1) 研修の方向

今の自分はどこを改善したらよいか。自分の現状をできるだけ正確につかみ、できるところからマイペースで改善していく。

少しでも改善できれば、必ず効果は子どもや学級に現れる。努力の結果をときどき、他者に

公開して、進歩を確かめてもらう。

(2) 学級づくりの側面

集団の力を必要とする授業(=追求方法の授業)が、学級づくりを効果的に進める。授業から離れた学級づくりは管理的になりがちである。今の学級のよいところ、問題点を見つける。学級は教師を写す鏡。そこに自分が映し出される。

授業で、子どもたちは以前の学習習慣を変えようという課題をもっているか。

子どもたち一人一人は、3つのコミュニケーション能力を身につけたか。

子どもたちは、教師、友だちの発言に対応。反応ができるか。他者に対して自分の考えを声に出して言うこと(つぶやくこと)ができるか。

教師は、子どもの反応をまともに受け入れ、素直に喜び、感動できるか。

教師は、子どもたちが何事にも自分の課題をもって主体的に取り組むように指導しているか。

子どもと教材の間と子ども間に、追求の必要な緊張感をつくる指名の方法を身につけたか。

学級は明るく、自由にものが言える雰囲気があるか。男女の仲はいいか。

以上が習慣化しているか。

(3) 授業方法の側面

今の自分と、今の学級の授業方法上の課題は何か。

それを具体的につかんで課題としているか。

授業に必要な方法をもっているか。それを使いこなしているか。

追求に必要な教材の知識(教材解釈)をもっているか。

よい「展開の核」(文学表現の言葉)を選び、対立をつくれたか。

1時間の授業で、文の言葉の対するイメージ・意味を変えることができたか。

(4) 研修の方法

自分の改善点・問題点を意識し、どうやるかを考え、授業をする。

子どもに意見を聞く。(授業の最終段階に意見を聞く。または書いてもらう。)

授業をふりかえる。うまくいったところ、子どもが集中したところ、快い緊張があったところ、停滞したところ、子どもがつまらなそうにしていたところ、などを具体的につかむ。

授業のビデオで確かめる。(子どもと一緒に見てもよい)課題をもって、部分を決め、意識的に見る。

分析する。

- ・ 展開の核となった教材の分析(問診問題は適切だったか)
- ・ 問診発問に対して、自分の考えを持つことができたか。
- ・ 意見を整理・分類し対立問題をつくることができたか。
- ・ 吟味・論証ができたか。(証拠となる言葉をさがすことができたか)
- ・ 言葉の意味やイメージを変えることができたか。
- ・ 各段階での教師、子ども間の対応関係、相互作用はうまくいったか。

また、改善点・問題点を確認し、次の授業に臨む。

(これらを連学年研修で確認していく)

2 共同研修

(1) 研修の方向

研修の基本は個人。しかしそれには限界がある。他者との交流によって自分の研修をより充実させるために共同研修に参加する。

人の力を借りて、気づきにくい自分のその時点での限界・不十分さに気づき、それを克服しあうのが共同研修の課題(変化・発達)である。人に教えてもらわないと進歩はできない。これは教師の学習も子どもの学習も同じ。

(2) 研修の方法

学年研修

- ・ 情報交換
- ・ 教材解釈

連学年研修

- ・ 公開授業の定例化

講師の先生が来校されない週に、かならず1時間公開する授業を設定し、連学年の先生は

たとえ短時間でも参観に行く。

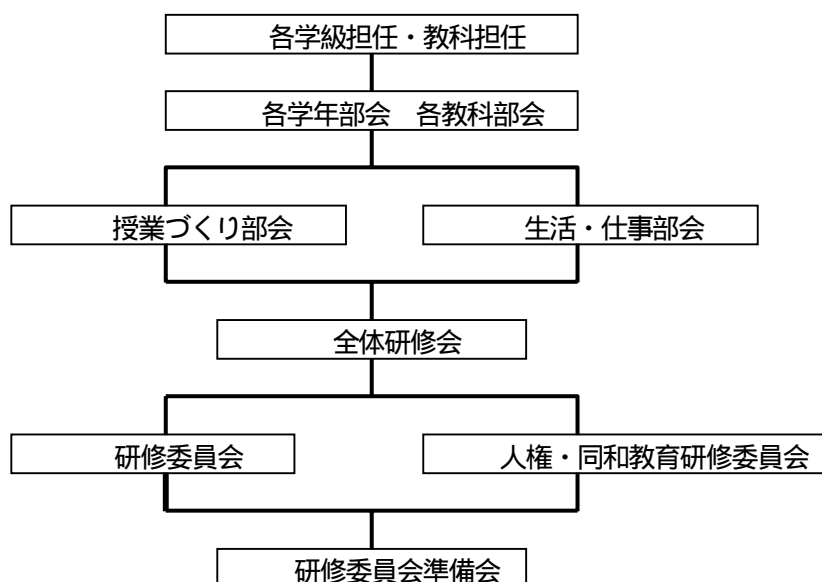
- ・ 授業分析
授業公開を行った週の木曜日を連学年研修の日とし、授業を分析し、良い点・課題を話し合う。(ビデオを使えばより有効)
 - ・ 情報発信
授業の様子、授業分析結果、課題、課題克服の方法等をまとめて、全員に発信する。
- 全体研修
- ・ 代表授業のビデオの分析
 - ・ 共通の問題点についての話し合い
 - ・ 実習研究

3 研修日(原則)

月	火	水	木	金
個人研修	学年研修会	全体研修会	学年研修会 連学年研修会	研修委員会 部会研修会

平成16年度 (平成15年度の研究内容の発展)

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果および今後の課題

1. 研究成果

積極的に自分の考えを出したり、また、友だちの考えを聞いて、反対意見を出したり、新しい問題を作ったりする子どもが増えてきた。それで友だちとディスカッションをしていこうとする姿が見られるようになってきた。

一人で行う準備学習を繰り返すことによって、自分の考えをもって授業に参加できるようになってきた。

考える方法(文を分ける。分けたら関係づける。)が分かってきたので、辞書を引いたり、言葉の意味を深く考えたりすることが、習慣的にできるようになってきた。

友だちとディスカッションすることで新しい発見が得られる経験ができ、授業を「楽しい」と感じる子どもが増えてきた。

合唱・表現に取り組むことで、声を大きく出せるようになったり、人前で思い切って自分を表現することができるようになった子どもが増えた。

2. 今後の課題

今まで習慣的に行ってきた「教え込み」スタイルの授業から、子どもたちのディスカッションによって追求する授業への転換を意識して取り組むようになった。しかし、教材解釈を徹底してやる力が不足しており、まだまだ、文を漠然としか読めていない。そのため、子どもの多様な考えに対応しながら授業を組織する準備が不十分になってしまう。その結果、教師が主導して子どもを引っ張る、教え込みの授業になってしまうことが多い。

子どもの意見を整理・分類する視点が的確にもてないので、授業の展開がうまくいかなかったことが多い。これも教材解釈不足からくる課題である。

子どものわずかな進歩に感動し、評価するという、教師の意識が足りないことを痛感する。私たちに、目標に到達しなければ認めにくいという価値観が残っており、結局子どもの進歩を見逃してしまっていることが多い。いつも子どもたちが満足感・達成感を感じられるような手立てが、もっと必要である。

何事も、徹底することができていないように思う。妥協してしまう点が子どもの進歩を妨げていることがある。また子どものなかに、「あきらめ」という意識もつくってしまっているのではないか。

準備学習を一人でどんどんやっていく力をつけなければならない。

どの子どもたちも一斉学習に入るための知識をもっていないと、やはり一斉学習には参加しにくい。

子どもの中に事実をつくっていくことが大切であると思う。事実とは子どもの姿。すばらしい動きや体の使い方をする子を教師が見つけ、その子のよさを周りの子どもたちに見せ、紹介することで、まわりの子どもを変えていくことができる。子どもの事実こそが、子どもを変えていく大きな原動力になる。

私たちはよく形式を整えようという意識が働くが、きれいな声だけの合唱をつくっても、見た目だけきれいな表現をつくっても、それは本当の合唱・表現ではない。子ども一人一人の可能性を引き出すことが本当の合唱であり、表現の目的である。

もっと教材に立ち止まる必要がある。教材の内容をつかみ、イメージをつくらなければならない。

・学力把握のための学校の取り組み

毎月2回ずつ(1回につき2日間)、講師を招いて指導・評価を受ける。

・フロンティアスクールとしての成果の普及

平成14年度	公開教育研究会	(2003年2月21日)
平成15年度	公開教育研究会	(2003年12月5日)
平成16年度	未定	

【新規・継続校】	14年度からの継続校
【学校規模】	19～24学級
【指導体制】	その他(一斉授業)
【研究教科】	国語・音楽・社会・算数・理科・体育
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】	無